



「推し本」のすすめ

「推し」という言葉が新しい意味を込めて使われるようになったのは、いつごろだったのでしょうか。

「推しメン」という表現が新聞各紙に登場したのは2011年です。このころには「推し」が世の中に広まっていたと思われまます。

ビブリオバトルというゲームがあります。参加者が面白いと思った本を持ち寄り、一人5分間ずつ本を紹介します。全員の発表が終わったあと、どの本を一番読みたくなったか投票し、最多票を集めた本を「チャンプ本」とします。

ビブリオバトルは、「推し本」の魅力を語り合う、いわば本の「推し活合戦」です。京都大学の研究室で生まれ、そこから普及していきました。「推し」という言葉が浸透していったのとはほぼ同じ時期のことです。

今では、大学、高校、中学の全国大会が行われています。地方予選と決勝大会の「推し本」を見渡すと、ファンタジー、ミステリー、青春小説、古典など実に多彩です。

最近のベストセラーがチャンプ本になるとは限りません。2022年、全国中学決勝大会のチャンプ本は、『アルジャーノンに花束を』。アメリカの作家ダニエル・キイスの約50年前の作品でした。

本とは、まことに多様なものです。同じ本でも、読み手によって読み方は変わります。読み手の話を聞いた聞き手の受け取り方はもっとさまざまに分かれます。

書き手↓読み手↓聞き手のコミュニケーションが化学変化を生み、思いがけない本がチャンプ本に選ばれる。だからビブリオバトルは面白く、一大学の研究室から全国の大学へ、さらに高校、中学へ広がったのでしょ。

狭い人生……。

もっと知らない世界を知りたい。

広い世界に出て、新しい自分になって、

元気になりたい。

ビブリオバトルの「推し本」に何度か取り上げられた花田菜々子さんの小説『出会い系サイトで70人と実際に会ってその人に合いそうな本をすすめた1年間のこと』の主人公が漏らした心の声です。

本は、知らない世界、広い世界を教えてください。どれも素敵な「推し本」に出会い、本の「推し活」をする、そんなギフトブックの習慣が広がることを願っています。

公益財団法人文字・活字文化推進機構理事長
読売新聞グループ本社代表取締役社長

山口寿一